ドキュメント この地で生きる

鎌田慧

筑摩書房

ドキュメント この地で生きる

鎌田慧

江苏工业学院图书馆
藏书章

筑摩書房

鎌田　慧（かまた・さとし）

1938年青森県弘前市に生まれる。早稲田大学文学部露文科卒。新聞，雑誌記者をへてフリーに。『ぼくが世の中に学んだこと』『ドキュメント・人間』『ドキュメント・村おこし』『日本断層地帯』『ドキュメント・海の国境線』『反骨鈴木東民の生涯』『大空港25時』『せめてあのとき一言でも』など著書多数。

ドキュメント・この地で生きる　©鎌田慧 一九九七

一九九七年六月二〇日　第一刷発行

著者　鎌田　慧

発行者　柏原成光

印刷　厚徳社
製本　積信堂

発行所　筑摩書房
東京都台東区蔵前二―五―三
振替〇〇一六〇―八―四一二三

一、九〇〇円

ご注文・お問い合わせ、乱丁・落丁本の交換は左記宛へ。
〒三三一　大宮市櫛引町二六四　筑摩書房サービスセンター
TEL　〇四八六六二一〇〇三

Printed in Japan ISBN4-480-81805-7 C0036

ドキュメント・この地で生きる＊目次

はての島　沖縄県波照間島
ぱいぱてぃろーま……4
マラリア地獄……15
忘勿石（わすれないし）……27
共生の思想……39
銅の都　秋田県小坂町
鉄道の終わり……52
栄光の日々……64
黄色い鉱煙……76
国際化にむかう……87
たたら製鉄の道　島根県横田町
山林王の誕生……100
鉄をつくる人たち……112

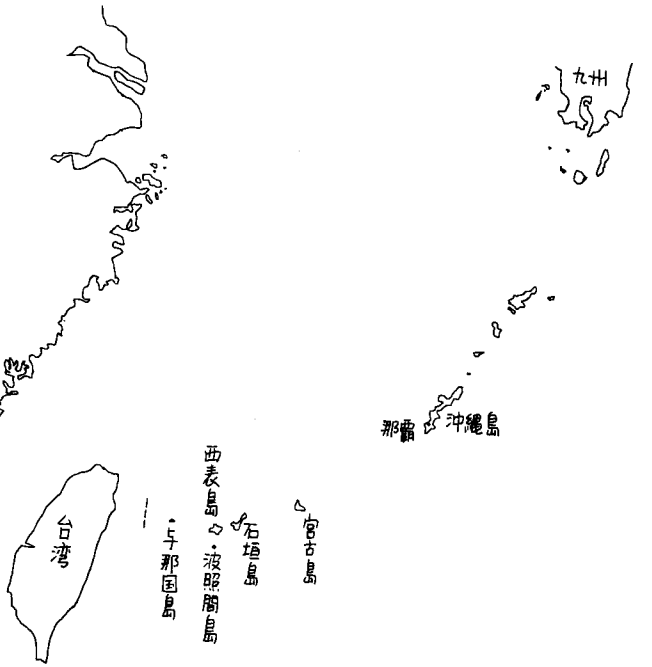
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

玉鋼の輝き……123
鉄とそろばん……134
まき網漁業盛衰史 長崎県奈良尾町
旅網(たびあみ)漁民……146
男の海……158
「李承晩ライン」秘話……169
キリシタンの里……181
エビに賭ける 大分県姫島
クルマエビの苦悩……194
塩と軍艦……206
先覚者の知恵……218
島をつくる……230
あとがき 241

ドキュメント・この地で生きる

はての島

沖縄県波照間島



ぱいぱてぃろーま

「南波照間島」

地図には載っていない島である。

沖縄の南端、太平洋の海原にポッカリと小亀のように浮ぶ島が、はての島・波照間である。そこからさらに南へむかった先に、夢の楽園・南波照間島がある、と伝えられてきた。

一九二一（大正一〇）年に書かれた柳田国男の『海南小記』には、「昔百姓の年貢が堪へ難く重かつた時、此島の屋久のヤクアカマリと云ふ者、之を済はんと思ひ立つて、遍く洋中を漕ぎ求めて終に其島を見出し、我島に因んで之を南波照間と名づけたと伝へて居る」とある。

南海の孤島・波照間は、幻の島としての「南波照間島伝説」をもつことによって、その名をよく知られている。あるべき夢の島をもとめて、島びとたちが島を脱出する行動は、政治にたいする痛烈な批判である。いつのころからか、わたしは南のはての島のさらにその南端の岬に立って、島びとたちが船をだしてむかった南の海を眺めてみたい、と思うようになっていた。

那覇から石垣島へはエアーニッポンで渡り、石垣から波照間までは船にした。一日一便の琉球

エアーコミューター便もあるが、東京からでは、朝九時に出発するこの便には間に合わない。

石垣港には、白い船体の快速艇がつながれていた。岸壁から踏板を渡って船内にはいる。舳先にある船室は長椅子になっていて、ほぼ四〇人ほどが座れる。後部の甲板の席にも二〇人ほどが座れるほどの大きな船で、わたしは拍子抜けする想いだった。船外機をつけたボートのような船で、海を渡るとばかり思いこんでいたからだった。想像していたよりもはるかに立派な船だった。纜を解くと、船はいきなりというように、猛スピードで走りだした。

快速艇は波の上を飛ぶようにすすむ。ブリッジ正面の青い遮光ガラスに、波しぶきがはね返る。大きな波が舳先を洗うのがみえる。ときどき、船体が板の上をバウンドするような硬い音がする。右手、手が届くほどちかくにみえていた竹富島の緑の島影が消えると、やがて、左手に黒島、そして新城島の島影が望まれる。右に遠く、高くみえるのは西表島である。船はそれらの島に挟まれた狭い海域をくぐり抜けるようにして走る。雲が低くたれこめ、風が強い。雲のあいだから、一瞬だけ太陽が顔をだした。と、濃紺の海がたちまち緑色に変って輝きだした。八重山の海の色である。

ブリッジで操縦しているTシャツ姿の若い男に、「いまで何キロくらい出ていますか」と尋ねると、彼はちょっと間をおいて、「六五キロ」と答えた。クルマ並のスピードである。乗客は十二、三人。若い欧米系の外国人がひとり乗っている。観光客らしいのは、彼だけだった。

石垣港を出て、五〇分ほどすると、水平線の上に低い島影が延びているのがみえる。波照間島である。外側にテトラポットを置いた防波堤と、港の開口部がみえる。なだらかな丘の上に建っ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ている煙突は、砂糖工場のものだろうか。

船はアッという間に接岸した。岸壁には民宿のワゴン車や小型のトラックなどが待っている。いくつかのダンボール箱が降ろされる。甲板に積まれていた、ちいさなコンクリートミキサーも降ろされた。ひとびとは陸揚げされた荷物をさりげなく、自分のクルマに積んで丘をのぼっていく。果ての島とはいえ、与那国島などよりは、はるかに石垣島にちかいので、船を出迎えにくるひとたちにも、さほどの想い入れはないようだ。

港から坂を登った平らな段丘のまん中に集落がある。道の途中に人家はなく、榕樹（ガジュマル）のむきだした根が目につく。まだ観光開発などに荒らされていない島のたたずまいが、ホッとさせる。

わたしたちを迎えにきたのは、よく陽焼けした小太りの主婦で、彼女は船から降りてきたおなじ部落の三人の老女も乗せ、それぞれの家へ送りとどけた。投宿したのは、彼女が経営する南部落の民宿である。

島の中央部には、このほか北、名石、前の三部落が集まり、すこし離れた西側に富嘉（ふか）部落、これら五部落で二三二世帯、五九六人がこの島の人口である。各集落ともに、防風林としての福木の並木が、しっとりとした日陰をつくっていて、サンゴの化石を積みあげた石塀と赤瓦の屋根が青空に映えて美しい。島のひとたちが、長い間、変ることのない静かな生活をつづけてきたことを感じさせる。

民宿の自転車を借りて、島を歩きまわった。一本道のむこうに海が展けている。その海に誘われるように、なだらかな坂を疾走して降りる。Tシャツ、短パン、ゴム草履、自分でも驚くべきほどの軽装で取材にまわれるので、わたしはすっかり解放された気分になっていた。タクシーを

呼ぶ必要もない。といっても、島にはタクシーもバスもないし、その必要もない。どこへ行くのでも自転車で用がたりる。

解放感はクルマ社会から逸脱しているためのものであることに、やがて気がついた。道のまん中を走っていても、ごくたまにすれちがうのは、農業用の小型トラックだけだった。

波照間島について間もなく、島の南端に出かけた。最南端の島の最南端の場所から、南の海を眺める、というのが、この島へきた目的のひとつでもあった。周囲一四・八キロ、最高標高五九メートルの亀の甲羅のようになだらかな島である。

道は島の輪郭に沿って環状に通っていて舗装されている。島の中心部から、環状の道を断ち切るように海にむかって降りる道がついている。最南端の場所にむかう道の両側には、背丈ほどのサトウキビが生い繁り、草むらには山羊が放たれて顔をだしたりする。

「日本最南端之碑」と刻まれたコンクリートの碑は、道しるべ程度の大きさで、仰々しくなくていい。そこから、なだらかに海に落ちこむスロープになっていて、隆起し、風化した灰色のサンゴ礁がつづいている。化石化した枝サンゴなどの形がはっきりしたものもある。踏みしだいて歩くと、もろく柔くなっているのがわかる。

南の水平線のむこうは、雲に覆われていてなにも見えなかった。台湾、そしてフィリピンにつながる海である。島の左側は断崖絶壁の高那崎（たかな）で、海はさほど荒れている様子でもないのに、数十メートルの切り立った崖の足元を、高く白い波が洗っているのがみえる。耳をすますと、風に乗って砕け散る波の音が聞こえてくる。

太平洋を南から渡ってくる怒濤が、日本で最初に遭遇するのが、この眇（びょう）たる孤島の岩壁である。

台風のときに高波は、数十メートルの崖を飛びこえ、切り立ったこの台地を洗うとか。岩肌は荒波の激突によって、鋭くえぐり取られている。この怒濤に立ちむかうようにして、ひとびとは夢の島をもとめて出発したのであろうか。

最南端の碑から少し西寄り、南の海にむかってひらかれている浜は、ペムチ浜である。岩場をそろそろ踏んで降りると、ちいさな砂浜になっている。岩のあいだに、シャンプーや浴槽洗剤のポリエチレン容器が転がっている。よくみるとすべて漢字で、台湾製のものだとわかる。漂流物はまっすぐにこの島へむかってくる。大麻が大量に流れついたこともあった、という。

島のひとたちが、南波照間島を目指して島を脱出したのは、人頭税が課されたころ、と伝えられている。人頭税は一五歳以上五〇歳まで、無差別的に、ひとりあたり定額の税金を徴収する悪税である。首里の琉球王府が、薩摩藩への貢租の圧迫を、八重山諸島の住民に肩代りさせるために実施した極端な収奪だった。これによって、住民は塗炭の苦しみにあえぎ、人口を減らすために、堕胎、間引きが横行した。西の果ての与那国島で、妊婦を岩の裂け目（クブラ・バリ）に跳ばさせて淘汰したり、身障者を人升田（トウングダ）に集めて虐殺したりしたのは、この重税をすこしでも回避したいためだった。苛政は虎よりも猛し、とは中国の諺だが、あるべき島への逃避行は、ロマンというよりは、島民の生活の悲惨を物語っている。

それより一八〇年前、与那国に漂着したあと、故国にむかうために、西表、波照間、新城と島づたいに送られていった朝鮮人が、波照間についても、見聞記を書いている。そこには、「男女耳を穿って小さい青珠を貫き、亦（また）珠を串いて項（うなじ）に掛る」（牧野清『新八重山歴史』）とある。装身

具でもあり、魔除けでもあったのだろうが、生活の余裕を感じさせる。

コメは西表島から移入していたようだが、島では黍、粟、牟麦をつくり、牛、鶏、猫を飼っていた、とある。が、その安寧に満ちた生活も、薩摩の琉球支配によって破られるようになる。

南波照間島への逃避行については、いくつもの書物に書かれているが、原典はなにか、残念ながら知ることはできなかった。柳田国男の『海南小記』の前すでに、笹森儀助『南島探験』（一八九三年刊）にも記述がある。が、ここでは簡潔な文体で要領をえた、岩崎卓爾の『ひるぎの一葉』の一文を引用しておきたい。

「島民ノ亡命説

人頭税率愈々加ハリ負担ハ主トシテ中産以下ノ肩上ニ移サレケレバ、村民ハ藩政ノ誅求圧政ヲ怨嗟セリ。順治五年（紀元二三〇八）尾久村（一本平田）ノ『ヤク』アカマリ民衆ノ窮愁ヲ救ハント、密ニ南方洋海ヲ普ネク探検シ漂渺ノ間ニ仙島ヲ発見シタリ。

楼閣玲瓏、綽約タル仙子棲ム、南波照間ト名ヅク。諸人ト共ニ移住スベキヲ説ケリ。依テ老幼男女四、五十人一行ト暗夜ノ晴夜ニ乗ジ、日用ノ道具ヲ山積シ将サニ解纜セントスルヤ、一婦鍋ヲ遺忘シ倉皇トシテ陸ニ去レリ。星移、転瞬ナラズシテ曙天ナラントハ。舟人危惧シ婦ノ帰来ノ遅キヲ卿ツ、捨テヽ楽土ニ旅立チヌ。

婦急ギカヘレバ船ハ順風ヲ孕ミテ航走セリ。婦息ヲ喘マセテ叫ベドモ呼応スルハ無情ノ潮、今ハ気屈シ自ラ衣ヲ裂キ全身ヲ掻キ悶ヘ、覚エズ手ニセル鍋ニテ砂上ヲ掻キツヽ狂乱声ヲ放ツテ泣キ心神喪失シ仆レタリ、後世此処ヲ『ナベカキ』ト唱フト云フ。

註　農民南航ノ口碑ニヨリ討究セバ台湾生蕃ノ或ル部落ニハ北方ヨリ移住セシト伝フ」

ここでは、「日用ノ道具ヲ山積シ」とあるが、異説がある。当時の島の造船技術では、せいぜいサバニ（小型の張り合せ舟）ていどでしかないのに、五〇人の人々を乗せ、航海中の食料品を積み込めるほどの舟があるはずもない。とすると、船はどこで調達したか、それが謎となる。

この間の事情について、宮良高弘『波照間島民俗誌』（一九七二年刊）には、つぎのように書かれている。

「そのころ、ヤグムラにアカマリと称するものがいた。ある夜、密かにムラの衆を集めて相談をした。それは、人頭税という重税をのがれて逃亡する相談であった。折りしも、この島には、人頭税の俵やグイ布を積む船が来ていて、順風の出るのを待っていた。役人たちが陸上で酒を飲み酔いつぶれ、島民も寝静まったスキを見はからって、その上納船を西南のウラピタの浜に廻し、村人を乗せて逃亡した。その折、一人の婦人が鍋を忘れたので、取りにもどった」

「上納船」は「数艘」だった、という説もある。「波照間島と紅頭嶼」と題して、「台湾日日新報」（一九〇九年一月一日）に掲載された、赤嶺江峰の文章である。

「今を去る二百余年以前の四五月、南風千里を吹き亙る季節であつたが、例の通り八重山本島を経て琉球藩庁に納入すべき貢租米と粟を数船に積載して、何時でも発航し得る様に準備を了へた。深更になると、外村の老幼男女総勢二百七十余名は、万頼静寂なる暗夜に咄嗟決起して、□間準備し置いた船に分乗し、夜の明けぬ内に遁走することになつた。此時、二百名近い総□の者、各船に夫々乗り込む内、一人の女は炊鍋を忘れたといつて、急いで鍋を取りに帰つた」

男女総数二七〇余名が、数船に分乗して出発した、との記述である。人数については、ほかに

もさまざまな説があって、「男女七八名」とか、はなはだしいのは「村人全員」というのもある。伝説には尾ひれがつくのがお定まりだが、のちに島を抜けでた島民に出会った、との話もある。

ところで、唐旅の帰途、嵐に遭った船が南の島に漂着したところ、一人の漁師が海に出ていて八重山の古謡を唄っていた。おどろいた船員たちが近づき「あなたはどなたですか」とたずねたところ、彼女は「私は波照間のヤグ村のアカマラです。今はこの島で楽しい毎日を過ごしています。見たところ八重山の人だと見受けられますが、困ったことがあるなら何でもご用立てしてあげましょう」と言って、船員たちの頼みに応じて水を船に積み込み、無事帰還させたと言うことが伝えられている（『夢の楽園　蘭嶼（パイパティローマ）島への誘い』竹富島文化保護委員会刊）。

話は次第に幻想的な色調を帯びるようになった。わたしはその本には当っていないのだが、史書としての『八重山島年代記』の一六四八年の項には、「波照間村のなかの平田村の百姓男女四〇～五〇人ほどが、大波照間という南の島へ欠落した」と記述されている、という（高倉倉吉『パイパティローマ伝説の風景』）。

この著者によれば、同書には、「この事件について取り調べるため、波照間首里大屋子（おおやこ）（波照間島行政のトップの役職名）は首里王府に召還された。調べの結果、管理不行届きがはっきりしたため彼は免職処分となり、島に戻された。しかし、彼の乗った船は漂流し、南の島に流れ着いた。その翌年、彼は南の島から与那国島を経て波照間島に帰ってきた」とも書かれてある、とか。

島の行政の責任者が、彼のクビになる原因をつくった脱出島民と脱出先で遭遇するという物語

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com